

第一次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2022. 1. 8

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

皆さんは毎朝、皆さんの学校までの道のりを歩いてくる。大抵は友達と一緒ににぎやかに歩いてくるのかもしれない。だが遅刻して一人で登校する日もあるだろう。「自分はなぜこの学校に通っているのだろう。どうして勉強しなければならぬのだろう」なんて思いながら。立ち止まって振り返ると、遠くに広がる緑豊かな風景が眼に入ってきたりする。青空が広がっていたり、鳥がのびのびと飛んでいたりする。耳を澄ませば、路傍の草むらから虫たちの声が聞こえてくるだろう。その光景の中で一人、皆さんは「こんなふう」に思ったかもしれない。

「世界があり、その中で僕は生きています。けれども、あの鳥と僕はどこか違う。鳥は、だれにも妨げられず自由に空を飛んでいる。しかし自分は制服を身にまとい、学校へ向かわなければならぬ。どうしてあの鳥のように、自由に生きられないのだろうか」と。

自分と世界の関係が、鳥が空を飛んでいるようにはぴたりと感じられない。ほんのわずかな、しかし自分ではどうしようもない宿命的なズレ。自分がこの世界にいるということがとても不思議な、奇妙なことに思えてくるのだ。同時に強い孤独感が押し寄せてくる。周りには家族も友達も、学校の先生たちもいるが、「自分一人でここに生きています」という感覚だ。知らないふりをしてはいけけない。よく思い出してほしい。感じた覚えがきつとあるはず。こうした感覚は大人になると失われてしまう。けれども実はこの感覚こそ、学ぶことの根拠に触れている証であり、あらゆる未来の「種」を生み出すキテンにはかならない。

鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするように自分の住む世界を対象としてとらえることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはつきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば①人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、

1

若い皆さんが世界と自分との間にズ

レを感じる理由だ。

重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくりかえていかなければならないということ。たとえば、森を切り拓ひらき、田畑をつくる。これこそ②人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証しなのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越こえがたいズレを感じながら、(孤独ではあるけれども)自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくりかえる努力を積み重ねてきた。それが I ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

しかし現代において、人間が行っている世界のつくりかえは、あまりにも高度で複雑だ。たとえば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならぬ。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならぬ。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、2 ジェット機が一機、空を飛べる。

そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦こよみをつくり、めぐる季節の知識を生かした B コウサクや狩しゅりょう 猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

人間がつくり出したものは数えきれず、一人では 3 学びきれない。人間は学ぶべきことを増やすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。たとえば、脳の「海馬かいば」という部分を研究している脳科学者の知人がいる。人間は何かを学ぶたびに海馬の最深部で「新生ニューロン」という神経 C ソンキを生成している。知人はこのメカニズムを研究しているのだが、同じ研究に取り組む研究チームは世界におよそ一〇〇チームもあり、日々成果を競きそっているという。

たしかに、何をやるにせよ勉強して覚えるべきことは多い。新生ニューロンに限らず、何か新発見をするほどの研究者になり

たいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かというところ、現実はそうなっていない。実は新発見というものは、発見者が十五〜十六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年になにかの「種」が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。若い力とは「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

理由の一つが「エラー」、つまり「失敗」する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。生物としての人類もそうやって進化してきたはず。突然変異というエラーを利用することで環境に適応し、生き残ってきたのだから。歳をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。③ 若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

物理学者のある友人は、高校で教わった「虚数単位」が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は-1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三十年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を發明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが「D」を開いたのだという。

「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気「E」が「D」を潰すが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことになるかもしれない。

何かを学んでいこうとするとき、「好き」という感覚ほど強い味方はない。一方、「嫌い」という感覚は、学びにブレーキをかける。好きなことはいくらでもできるが、嫌いなことはやりたくない、と。加えて、好きや嫌いという感覚は個人的な感覚だから、誰かに「私はリングが好きだ」と言ったとしても、「それは君が好きなかだけ、僕はバナナが好きだ」と返される場合が少なくない。好き嫌いは何かをブロックしてひとりよがりな世界を生み出すことがあるのである。

しかし、内面でわき起こる好きや嫌いは、大切にしなければならぬ。それが人生をつくっていくのだから。だが何かを本当に学ぶためには、好き嫌いの感覚を、さしあたり停止して、どうして好きなのか、どうして嫌いなのかを正視しなければならぬ。矛盾していると思うだろう。しかし、数学の勉強が嫌いなら、どこが好きでどこが嫌いなのかを考えてみてほしい。考えることが、単なる好きや嫌いの感覚から距離を置くことを教えてくれるから。④それが学ぶことの第一歩。今のうちにその術を身につけてほしい。好きだから、嫌いだからで終わってはいけぬ。

学ぶためのもう一つのポイントは、全体を見ること。それと同時にどこか一点を見なければならぬ。全体だけを見ていても絶対に自分のものにはならない。これも矛盾していると思うだろう。だがスポーツを想像すればわかりやすい。スポーツは単に肉体の問題ではない。たとえば野球では、筋力を鍛えさえすればホームランを打てるわけではない。筋力だけでなく、身体全体を考え、何かポイントをつかむことでバッターとして成長できる。人はそれぞれ「癖」を持っているものだが、それを捨て、自分なりのポイントをつかむことが基本だ。

これは思考の基本でもある。人間がものを考えるとき、公理から出発することはありえない。全体の*コンテキストをぼんやりと視野に入れながら、その中で手がかりを見つけて考えを進める。A || B、B || C、C || Aといったような論理は、考え抜いたあとで、他者に説明するために組み立てる表現だ。事件現場に立つシャーロック・ホームズを想像してほしい。彼は、現場全体を見ながら、頭の中ではそれまでに集めた証拠品のイメージや証言を繰り返していることだろう。全体を見ながら、どこかにF特異点を見いだそうとしているのである。さまざまな要素があり、それらがどういう関係にあるのか、そしてそれらの関係がどう全体をかたちづくっているのかを見ていくのである。

こうした思考は、数学でも国語でも、研究でもビジネスの現場でも変わらない。「文科系と理科系ではアタマの使い方が異なる」などと思いつ込んでおかない。原則は同じなのだ。文章全体を見ていながら、どこかに必ず文章全体にかかわるひっかかりがあるはずだ。それをつかむ。そのポイントを自分なりに展開することで人間はものを考え始めることができる。学校の勉強には

II

II が用意されている。皆さんが誤った答案を書けば、間違いを指摘される。だが皆さんにGカされているのは、

II を知ることではなく、頭の働かせ方を学ぶことだ。

*コンテキスト……「状況」あるいは「文脈」。

(小林康夫「学ぶことの根拠」より)

(一) 〓 線部 A 「キテン」、B 「コウサク」、C 「ソシキ」、E 「ケイセイ」、G 「カ(されて)」を漢字に改めなさい。

(二) 〓 線部 D が「成果となって現れた」という意味になるように、「 」に補う漢字一字を答えなさい。

(三) 〓 線部 F 「特異点」と同じ意味で用いられている表現を、F をふくむこの形式段落から一つ、次の形式段落から一つ、それぞれ五字以内でぬき出しなさい。

(四)

1

3

 に当てはまる言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア どうてい イ もっぱら ウ ようやく エ とりわけ オ ひときわ

(五)

I

 に当てはまる言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学問 イ 人生 ウ 文化 エ 歴史

(六) II に当てはまる漢字二字の語を考えて答えなさい。ただし II は二か所あります。

(七) — 線部① 「人間は、く生きていない」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鳥や魚は自分が住む世界に満足して楽しく生きているが、人間は自分の住む世界に対して常に不満を抱いて生きている。
- イ 鳥や魚は自分の住む世界にしばらく自由には生きていますが、人間は自分の住む世界からさまざまな制約を受けて生きている。
- ウ 鳥や魚は自分の住む世界を意識しないで生きているが、人間は自分という存在や自分の住む世界を意識しながら生きている。
- エ 鳥や魚が生きている世界はそれぞれ空や水の中に限定されているが、人間はどのような世界にも適応して生きている。

(八) — 線部② 「人間だけが持っている自由」とは何ですか。それを述べた二十三字の表現を本文中から探し、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。ただし「くこと。」に当てはまる形で答えること。

(九) — 線部③ 「若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ」とありますが、筆者がこのように述べる理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若いということは、とかく失敗を招きがちであるという点では弱点であるが、一方でその失敗が、それまで当たり前とされていた考えを打ち破る新しさにつながることもあるから。

イ 若いということは、知識量が不足しているという点では弱点であるが、細分化された研究分野にとらわれない発想ができ、

それが新たな発見につながることもあるから。

ウ 若いということは、恥ずかしい思いをする機会が多いという点では弱点であるが、そうした経験に負けることなく新しいことに挑戦ちようせんすることもできるものだから。

エ 若いということは、ちよつとしたことでも気になってなかなか理解が進まないという点では弱点であるが、その気になったことが後の新発見の種になることもあるから。

(十) ——— 線部④ 「それが学ぶことの第一歩」とはどのようなことを言っているのですか。句読点もふくめて七十字以内で説明しなさい。

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「私（紗季）」が五歳の時、「母ちゃん」は家を出て東京へ働きに行き、「私」は「バアバ」と二人、千葉で暮らしています。「母ちゃん」からは定期的に手紙とお小遣いが届き、「母ちゃん」自身も季節ごとに千葉に帰って来たので、「私」は格別つらい思いもせず、「バアバ」と家事を分担して、平和で落ち着いた日々を送っていました。「私」が中学三年の時、「母ちゃん」は理由も言わずに突然千葉に戻って来て、「私」、「バアバ」とのぎくしゃくした三人暮らしが始まりました。ある日、「母ちゃん」は浜辺に出かけようと「私」を誘います。

「紗季ちゃん、ごめんね」

ビニールシートに腰を下ろしておにぎりを頬張りながら黙って海を眺めていたら、母ちゃんに突然、謝られて焦った。

「なんで？」

「なんでって、長い間、紗季ちゃんのこと放っておいたくせに、突然帰ってきて、紗季ちゃんにすっごく気を遣わせちゃってるし。

「飯もあんまりおいしく作れないし」

「このおにぎり、おいしいよ」

「ありがと。でもねえ……」

白波がいつもよりたくさん立っている。思ったほど蒸し暑くはないが風が強い。ときどきビニールシートの端が舞い上がって、砂も舞い上がって、そのたびに母ちゃんと二人でおにぎりを片手で覆いながらも片方の手でビニールシートを押さえ込んで、傍から見たら、なにやってんだ、あの二人つて思われるだろうタバタぶり。どこがワイキキ気分なんだ。なんとか大きめの石を見つけてきてビニールシートの四隅に置き、一息ついたところで、

「勝手な母親だよ。グスン」

母ちゃんが手に握っていたタオルハンカチを眼に当てた。

「そんなことないよ、別に」

私は座り直して二つ目のおにぎりを選びながら答えた。答えた直後に、我ながら気持ちが入ってないなと思ったら、笑いがかみ上げた。母ちゃんも照れくさそうに肩をすくめている。

「ねえ、紗季ちゃん。なんで母ちゃんが戻ってきたか、わかる？」

「え？」

来た。なんで戻ってきたかつて？ それは娘が愛しくて？ 違うよね。バアバのことがそろそろ心配になったから？ まだ元気そうだけど。それとも東京でなんか問題を起こしたせい？ 殺人事件に巻き込まれたとか？ まさかね。①うーん、なんと答えれば無難だろう。

「あのねえ」と、私の答えを待たずに母ちゃんが口を開いた。

「ガン」

「え？」

あまりにも想定外の答えである。横を向くと、母ちゃんは、目を細めて海の彼方に視線を向けたまま、a 顔を
している。そういう展開？

「ガンって、病気の癌？ 誰が？」

母ちゃんの話し方は文太に似ている。肝心な言葉が欠けている。こういう真面目な話をするときぐらい、ちゃんと文章にしてほしい。

「誰が癌になったの？」

畳みかけると②母ちゃんがゆっくりこちらに首を回してニカッと笑った。こういう話題には似合わない顔だ。

「さて、誰が癌になったのでしょうか。ここで問題です」

「問題？」

「一番、バアバ。二番、えーと、文太んちの犬のコロ。三番、私」

「なに言ってるの?」

私ははつきりと眉間に皺を寄せた。すると母ちゃんは笑ったまま、私を見つめる。答えを待つ司会者気取りか。

バアバは先月、鴨川病院で定期健診をしてなんの異常もなかったと言っていたし、二番を言うとき、えーとって迷った時点でこれははずれだとわかる。こんな問題、小学生だって当ててるぞ。

「母ちゃん?」

「正解!」

母ちゃんは勢いよく人差し指をかざしたあと、

「では、なんの癌になったでしようか」

「またクイズ形式ですか?」

「うん。一番、乳癌。二番、子宮癌。三番、前立腺癌」

私はイラツとして、「三番」と b 答えてやった。すると、

「やーね、紗季ちゃんったら。前立腺って男にしかないんだから。やだあ、もう」

母ちゃんは私の腕を思いきり叩いて笑った。

「じゃ、乳癌?」とさらに b 答えたら、「ピンポン」って、どういう母親だ。

「でもね、聞いて聞いて。なんとラッキーなことに、鴨川病院に『神の手』って言われている乳癌の専門医がいらっしやるの。週刊誌に載ってたの、『名医が教える名医』って特集に。たまたま見た週刊誌だよ。これってぜったい運命でしょ。だって私がいちばん欲しているお医者様が、バアバと紗季ちゃんのすぐ目と鼻の先にいらしたのよ。運命以外の何ものでもないわよね。だから母ちゃん、戻ってきたってわけ。これは神様が、紗季ちゃんのところに戻りなさいって導いてくださったと思えないのよ」

「いや、そういう話の前に、そもそもなんで乳癌だったってわかったの?」

「あのね」と母ちゃんは語り出した。

「前に勤めていた病院でやった血液検査でわかったの。もしかして癌がどこかにある可能性があります、そういう数値が出てま

すつて」

「なんの数値？」

「よくわかんない。で、それから全身の検査をしたの。でもなかなかわからなくて。マンモグラフィとかもしたの。あれ、痛いんだから。アクリルの板の間におっぱいをギューツと挟んで、ギューツとギューツと挟んでしばらくお待ちくださいって。しかも縦横二回ずつよ。もう拷問みたい。でもそのおかげで、ちよつと気になる影が映っていますって言われたの。でもそれが腫瘍なのか、腫瘍だとして悪性か良性かはわからないので、あとは専門医でちゃんと検査したほうがいいですねって」

「で、鴨川病院に決めたってこと？　じゃ、まだ確定したわけじゃないじゃん」

私が慎重に言葉を選んで促すと、

「でも、わかるのよ。だって自分の身体だもの。あ、これは乳癌だつて。うん、わかるわかる」

母ちゃんはまるで死刑宣告を受けたにもかかわらず、気丈に平静を装うマリー・アントワネットのような高貴な首の動かし方をして、ゆっくり頷いた。私は隣で溜め息をついた。この母ちゃん、思ったより手がかかる。③ 話が論理的に進まない。

「鴨川病院で検査してくれるの？　そんな『神の手』なんて先生の予約、取れるの？　何ヶ月も待つかもしれないよ。何ヶ月も待たされてるうちに、ホントに癌だったとしたら、進行しちゃうよ。どうする気？」

私は捜査もののドラマに出てくる刑事になったつもりで **c** つぎばやに問い質す。すると母ちゃんが、マリー・アントワネットの目つきでじつと私を見据えた。

「いい？　紗季ちゃん、よく聞いて。いちばん大事なことは、私が癌か癌でないかってことじゃないの。そうじゃなくて、今、この時間を大切に生きていきたいって話。失われた十年間を挽回しなきゃ。私、決めたの。私がどうなるうと、最後まで紗季ちゃんとバアバのそばにいようって。そしてどんな結末が待っているようにも、最後までぜったい笑顔を忘れずにいようって。だからお願い、紗季ちゃん。私の残された命に協力して」

文太よりわかりにくい。私はしばらく俯いて、それから質問した。

「このこと、バアバは知ってるの？」

すると母ちゃんは目をつぶった。

「知らせてないの？　じゃ、なんであたしにだけ話すのよ？」

母ちゃんが黙った。

「バアバにも言わなきやダメでしょう？」

返事がない。

「まさか話さないつもり？」

母ちゃん、打つて変わつて寡黙になる。この沈黙の時間を利用して私は頭を整理してみた。まず、一般的検査はした。胸に腫瘍らしきものが見つかった。でも悪性か良性かはまだ判明していない。それなのに母ちゃんは思い込んでる。乳癌になった。でもつて癌になったことを前提に、これからの余生をどう過ごすかということだけで頭がいっぱいになっている。いや、そう考えることで死への恐怖から逃れようとしているのではないか。

「あのね、紗季ちゃん」

母ちゃんがやつと口を開いた。

「ここに戻ってきてから、母ちゃん、ずっと悩んでたの。話そうかなあ、話さないでおこうかなあつて。でもきつとバアバにこの話したら大騒ぎになっちゃうと思ったの。バアバつて、ああ見えて弱い人なのよ。普段強がり言ってる分、大きな事件が起こるとへナヘナつてなっちゃうところがあつてね。ジイジが死んだときも長いこと元気なかつたでしょ。ジイジも癌で亡くなつたから、なおさらショック受けると思うのよ。もう歳だし。余計なことで心配かけたくないし……」

余計なことじゃないよ、大事なことだろうかと、私は心の中で悪態をついた。

「母ちゃんね、びつくりしちゃつたの。だつて紗季ちゃんつたら、ちよつと会わないうちに本当にしつかり育つてたんだもの。どんなに遅くなつてきたもんね。自分の娘とは思えない。私がそばにいないからよかつたのかな、なんちゃつて」

「別にあたし、遅しくなんかない」

私は片手に食べかけのおにぎりを持ったまま、腕を組み、立て膝の上に頭を載せた。泣いたわけじゃない。でも④泣きたい気

分ではあった。

また風が吹いた。潮の香りに混ざってかすかに甘い匂いがする。私は顔を上げ、風の吹いてくる方向を振り返った。もしかして浜木綿か。この砂浜の近くに浜木綿が群生しているのを私は知っている。

(二) 、に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただ

し は二か所あります。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---------|---|---------|---|---------|---|--------|
| a | ア | しみじみとした | イ | さばさばした | ウ | はればれとした | エ | うきうきした |
| b | ア | すっぱりと | イ | つつけんどんに | ウ | ぶつきらぼうに | エ | ぶつぶつと |

(二) に入る漢字一字を答えなさい。

(三) — 線部①「うーん、何と答えれば無難だろう」とありますが、ここから読み取れる「私」についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 長い間自分を放っておいたことをまだ許せず、母親が事情を説明して謝ろうとしたり機嫌を取ろうとしたりしても、素直に受け入れられずにいる。

イ 母親と二人きりで話すのは久しぶりなので、母親が心を通わせようと次々と話しかけてきてくれても、照れくさくてまともにも受け答えできないでいる。

ウ 母親が大事な話を切り出そうとしていることはわかるが、内容についてはまったく見当もつかず、どのような反応を示せ

ばよいのか判断できないでいる。

エ 離れて暮らしていた時期が長くて、母親が何を伝えようとしているのか見当も付かないとはいえ、ばかげた想像ばかりしてしまいう自分にあきれている。

(四) ——— 線部② 「母ちゃんがゆっくりこちらに首を回してニカッと笑った」とありますが、「母ちゃん」がこのような表情を見せたのはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が癌であることを告げれば娘がとても悲しむだろうと考えるとやり切れず、自分が笑いかけることで、せめて今だけでも笑顔にしてやりたいと願ったから。

イ 娘が自分の話に関心を示し始めてくれてうれしかったのに加え、自分は癌かもしれないが心配はしなくてよいという思いを、おどけてみせることで示したかったから。

ウ 癌の検査を受けている間会えなかった娘がすっかり大人びたのを頼もしく思う反面、親子で過ごしている時くらいは、子供らしく無邪気なままでいてほしいと思ったから。

エ 自分が癌であるかどうかということよりも、家族の側で生きる時間を大切にして笑顔を忘れずにいようと決意したことを、娘にもはっきりと伝えておきたかったから。

(五) ——— 線部③ 「話が論理的に進まない」とありますが、ここまでの「母ちゃん」の話をまとめると、どのような内容になりますか。本文中から五十字以内の表現を探し、最初と最後の三字をぬき出しなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

(六) ——— 線部④ 「泣きたい気分ではあった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から二つ選び、それぞれ記

号で答えなさい。ただし、解答の順序は問いません。

ア 祖母が祖父の死から立ち直るのに時間がかかったことを知って、母親の死に直面すれば今度はどれほどの衝撃しやうげきを受けるだろうと思うと、胸が張り裂けそうになったから。

イ 母親に残された時間がそれほど長いものではないかもしれないと知らされて衝撃しやうげきを受け、普段はあまり意識せずに過ごしてきた母親に対する思いがこみ上げてきたから。

ウ 明るくふるまっていた母親が、娘をひとりぼっちにしていたことを後悔こうかいする気持ちを突然語り始めたので、その時のさびしかった生活を改めて思い出してしまったから。

エ 自分は家族が重病でも平気でいられるような人間ではないつもりなのに、久しぶりに会った母親から対応の冷たさを皮肉まじりに指摘されて悲しくなったから。

オ 母親が癌かもしれないということに加えて、バアバにはそれを秘密にしておかなければならないという重苦しい状況に自分が耐えられるかどうかわからなかったから。

〔問題三〕 次の文章は、前問の本文の続きです。これを読んで後の問いに答えなさい。

母ちゃんの爆弾告白のあと、私はバアバと目を合わすことができなくなった。バアバとだけではない。母ちゃんともだ。家中がよそよそしくなつて、なにか言おうと思うたび、スムーズに単語が出なくなつた。バアバはそんな私の変化に明らかに気づいている。でも理由を聞こうとはしない。こういうとき、放任主義つてのは困る。急にバアバとの距離が遠くなった気がした。昔は互いに口をきかなくてもわかり合っているという確信があつたけれど、最近、バアバが何を考えているのかわからなくなった。私のせいだ。私が本当のことを言わないから、バアバも本心を出せないのだ。でも話すことはできない。母ちゃんとの約束だもの。

この居心地の悪い家庭内環境を改善するためには、他者の力が必要になる。まだジイジが生きていた頃、バアバがときどき漏らしたものだ。

「ジイジだったら、あたしと喧嘩すると必ずその日の夜は友達連れて帰ってくるんだよ。他の人の前で言い争いできないだろ。で、お酒出したりつまみ出したりお喋りしたりしているうちに、なんで喧嘩したか忘れちゃつてき。いつのまにか仲直り。いつつもその手でごまかされるんだ」

思い出した。だから①今回の問題も、この手をおおうと私は決めた。

こういうときは文太しかない。異種格闘技のような女三人家族の間にはまり込んで平静を保てるのは、鈍感な文太ぐらいのものである。鈍感つて褒め言葉だ。文太がいるとバアバも母ちゃんもなぜかホツとするらしい。顔がほころぶ。幼稚園の頃からずっとそうだった。

文太は最初の頃、抵抗した。悪いじゃんとか恥ずかしいからやだよとか言つて、ウチへ来るのを拒んだ。なに言つてんの、子供の頃はこつちが誘わなくてもズカズカ上がり込んで勝手に飯食べて帰つたりしてたじゃんと言つても、いやあ、そういう無謀な年頃は過ぎたとか言つて手を横に振つた。でも私は諦めず、ほとんど強引に文太の袖を引っ張つて、学校帰りに文太をウチの前まで連れてきた。

「こんにちは」

文太が遠慮がちな目つきで縁側からウチを覗き込むなり、

「あらあ、文太君。いらつしやい」

母ちゃんが台所から出てきて右手にフライパンを持ったまま甲高い声で元気に迎えた。この家で今、陽気なのは母ちゃんだけだ。

「げっ」

母ちゃんと対面した途端、文太が声を発した。

顔をしている。

「おばさん、大丈夫なんっすか、起きてて」

「え？」と、私と母ちゃんが同時に反応した。文太は私と母ちゃんを交互に見ながら、

「だって、あれなんしょ？」

「あれってなに？」

私は反射的に問い質す。いや、問い質してはいけないだと、気づいたときは覆水

「だから……、癌とかつて？」

「なに言ってるの！」

思わず声を荒らげたところへ、バアバが自分の部屋からひよっこり現れた。やばい。私は慌てて、

「だからあたしはまだ今度の試験範囲聞いてないしさ。でも結局、医療問題とか時事問題が焦点になるって、文太はもう知ってたわけ？」

口から出任せで、自分でも何を言っているのかわからないけれど、とにかく喋り続けるしかない、思いついた単語をつなげてどうにか学校の話題にすり替えるべく、頭をグルグル回転させていたら、いつのまにかバアバが文太の近距離にやってきて、
ズワリと言つてのけた。

「朋子が乳癌の疑いがあるって東京の医者に言われたらしいんだけど、こっちの鴨川病院で調べてもらったら、悪性じゃないこと

がわかった。そういうことで、心配かけて悪かったね、文太。父ちゃんにもよくよくお礼、言つといて。おかげさまで助かりましたつて」

私は猛スピードで母ちゃんのほうを振り向いた。聞いてないけど、私。勢い余つて髪の毛の先が口に入った。だいたいバアバがなんで知ってるんだ。内緒じゃなかったのか。毛先を口から引きずり出す。つていうか、なんで文太まで。文太のお父ちゃんもか？

「で、決めたんか？」

だから目的語、つける。お願いだから *センテンスにしてくれつて。「なにを？」と私は防波堤の上を歩きながら後ろをついてくる文太に聞き返す。

「東京行き」

あれから一波乱があつた。私はとんでもなく荒れた。こういうことをきっかけに、人は引きこもりになったり人間不信に陥つたり、無差別殺人に走つたりするんじゃないか。そういう心境がかすかに理解できる気がした。こんなに泣いたら脱水症状になると思うほど涙がとめどなく溢れ続けた。呼吸も苦しくなつた。私が痙攣を起すほどに泣いている間、母ちゃんははずつと小声で謝り続け、バアバは黙つて私の背中をさすり、そして文太は帰ろうともせず、少し離れた籐椅子に座つて口を半開きにしたまま心配そうにこちらを見つめていた。その三人の様子を涙越しにチラチラ見ているうち、だんだん恥ずかしくなつてきた。まわりは全員が静かなのに、自分だけ泣きわめいている。どう見ても変だろう。滑稽でさえある。そう思つたら、急に気が晴れた。泣くだけ泣くとすつきりするというのは本当だ。

そして翌朝、私が目を思い切り腫らして階下に降りていくと——その日ばかりは筋力強化降りをする気分にはなれず普通に降りていったのだが、バアバと母ちゃんが食卓に座つて私を待ちかまえていた。二人が言い争いをせず、穏やかな顔で向かい合っている。快拳だ。

「おはよう」

「一人揃って、バカに機嫌がいい。」

「おはよう」と、私は俯いたまま応えた。

「あんた、何時に出る？」とバアバ。私は掛け時計を見上げ、「うーん、七時四十五分」

「よし、じゃ、十分だけ。話ししていい？」

母ちゃんは、慈愛に満ちた視線でバアバの発言にいちいち頷く。

「いいけど」

本当はこんな目で学校に行くのは嫌だから、午前中はさぼろうかと思っていたが、家にいるのも気まずい。

「あのね、あれから母ちゃんと話したんだけど。あんた、東京の高校、受験してみる気、ない？」

「はあ？」

「まあ、受かるかどうかわかんないけどさ。とりあえず下調べもかねて、夏休みだけ母ちゃんと東京で暮らすってのは、どう？」

「そこまでの流れを文太に報告したら、「決めたんか」と聞かれたのだ。」

「まだわかんないよ」

「でも気持ちは東京なんだろう、お前」

「どうだろう。別に東京暮らしに憧れはない。ただ、バアバと母ちゃんにそう提案されて、バアバも何が根拠か知らないが、それがいいよ、そうしなさいよ、あたしのごことは心配しなくても一人でなんとかやるからと拳を掲げて宣言し、かたや生涯、この南房総で、バアバと私と三人で暮らすと言っていたはずの母ちゃんも、「紗季ちゃんが嫌じゃなかったら、どうかな、なんて思っつて？」と見事な変節ぶりを示したのである。

「でもあれだよ」と私が文太に言いかけたら、「なにが」と文太が聞き返した。やったね。仕返した。

「だってまさか文太のお父ちゃんが『神の手』の釣りの師匠だったなんてさ。偶然にもほどがあるよ。おかげで検査の予約、早めてもらえたんでしょ？」

「まあ、無理やりってほどでもないと思うけどな」

母ちゃんの話によると、案の定、『神の手』の予約は数ヶ月先まで取れないことがわかり、困っていたところ、鴨川病院のロビーでたまたま文太のお父ちゃんに出くわして、勢い事情を説明したら、「俺が聞いてやる」と請け合って、その結果をバアバに知らせたせいで、秘密が秘密でなくなったという経緯らしい。だから別に紗季ちゃんを騙したわけじゃないの、信じてと、母ちゃんは弁解していたけれど、だったら私に報告してくれてもいいのに。思い出すと腹が立つ。私だけバカみたい。

「癌のこと、最初に告白した相手が紗季であるのは確かなんだからな。それだけおばさんは紗季を頼りに思ってるってことさ。一緒に東京、行ってやれよ。どうせ夏休みだけだろ？」

センテンスとして成立している文太の言葉を聞いたのは、初めてかもしれない。

「どうかなあ。そのままずっと東京に居座つちやつたりして」

② 文太の顔を横目で盗み見たら、

「あつ」と文太が叫んだ。

「今度はなに？」

「浜木綿」

文太の言葉はセンテンスになっていなかったけれど、私にはわかった。私たちは同時に防波堤を海側に飛び降りて、同じ方向へ向かった。走りにくい砂地を根性で走りながら、振動で声を震わせながら、私は唱えた。

み熊野の 浦の浜木綿 百重なす 心は思えど ただに逢わぬかも

私は文太の背中を必死に追う。波の音が途切れなく鳴り響いていた。

(阿川佐和子『カモメの子』)

*センテンス……文。

(七) に入る語句を、すべてひらがなで答えなさい。

(八) — 線部①「今回の問題も、この手を使おう」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大事なことをすぐに知らせなかったことに祖母は腹を立てるに違いないので、家族をホッとさせる存在の文太にも同席してもらって、その怒りを少しでも和らげてもらおうということ。

イ 祖母と母親とが気まずい関係になっている状態なので、昔からよく遊びに来ていた文太を招待して場の雰囲気をやかにしてもらい、食事くらいは落ち着いてとれるようにしようということ。

ウ 家族三人が思いを口に出せない状態になってしまっているので、家族にも親しまれている文太に来てもらって、これまでのような日常生活を取り戻すきっかけを作ってもらおうということ。

エ 母親の病気について一度家族で話し合わなければならぬのに誰も口火を切ろうとしないので、事情をよく知る文太に一役買ってもらって、話をするきっかけを作ってもらおうということ。

(九) に入る語句として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 味方に足をすくわれたような

イ 妖怪に出くわしたような

ウ 地獄で仏に出会ったような

エ 苦虫をかみつぶしたような

(十) — 線部②「文太の顔を横目で盗み見」とありますが、ここから「私」のどのような気持ちを読み取れますか。最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親の病気のことで文太や彼の父親にも世話になったのに、その恩返しもろくにしないまま上京してしまったら文太に嫌われないだろうかと心配する気持ち。

イ これから母親と二人で東京で生活するのがよいかどうか迷っているので、家族の事情を理解してくれている文太の反応もそれとなく確かめて参考にしようという気持ち。

ウ 本当は東京の高校などに進学したくないので、離れ離れになってしまう可能性もあることを文太に告げて、受験を止めてもらおうと期待する気持ち。

エ 自分が東京で暮らすのは夏休みの間だけだと思いついでいる文太に、このまま会えなくなる可能性もあると告げたらどのような反応をするのか見てみたいという気持ち。

(十一) この小説の終結部について鑑賞した次の文章の I、II に、指示に従って適当な表現をそれぞれ入れなさい。

小説の最後に「私」が走りながら唱えているのは、『万葉集』巻第四におさめられている歌です。男女、または親子、兄弟、友人などの間の、恋しく思う気持ちや親愛の思いをのべた「相聞」歌に分類されています。「私」と文太はこの歌を、中学三年生になった最初の国語の授業で習いました。

一首の意味は、「み熊野(＝神聖な土地である熊野を敬った表現)の浦に生えている浜木綿の葉が幾重にも重なっているように、幾重にもあなたを心に思っているけれど、直接には逢うことができないよ」というものです。

「百重なす 心は思えど ただに逢わぬかも」という『万葉集』の歌の表現は、「私」と「母ちゃん」、「バアバ」の三人家族が、

I(三十字以内で説明する)

ことを暗示していると考えられます。また「

II(本文中から一文で探し、最初の五字をぬ

き出す)

「^き」という表現からは、「私」と文太との心が通い合^あい始^はめていることがうかがわれ、離^{はな}れていてもお互^{たが}いを恋^{こい}しく思^{おも}い合

う関係^{かんけい}にな^なってゆ^ゆくとも想像^{さくしやう}されます。このような余韻^{よゐん}をただよわせつつ小説^{せうせき}を閉^とじるのにも、『万葉集』の歌^{うた}が効果^{こうか}的に用^{もち}いられています。